



號三十二第
月八年四十和昭
行發日五
行發日五・回一月毎
錢五金部一價定誌本一
錢拾六金(共稅)年一
助之幸川大 編發行發
一ノ七西座銀區橋京市京東
社信選盟同 所行發

ブラジルの國際關係

椎野 豊

一八八九年の共和革命でブラジルの帝政が没落するまで伯國は大體に於て親英政策をその對外政策の根幹とするの觀があつた。それは伯國の名家であるポルトガルの親英政策に影響された事勿論であるが、また政體の類似や投資關係に由来した事はいなむがたい事實の様であつた。

しかしながら同革命の結果一夜にして大部分の國民の夢想だにしなかつた共和政府が現れ、その結果政府の對外方針も自ら親米政策を基調となすに至つた。米洲に存在した唯一の帝政政府の没落がその反動として共和制度の本尊たる米國に接近せむとするのは當然であつた。

位を危殆に導く可きは言ふを俟たない。

兎も角も「三〇年革命」の結果現れたゲアルガス政府は、この政策を以て關係列國に對處し、比較的公平な國際的態度を示すにいたつたので従前の政府に比しより大なる國民的興奮を擔ふ事となつたのであるが、英米等の如き一部國家には可成り不評判であつたらしい。

策し、先づ羅典アメリカ諸國に於ける獨伊の勢力驅逐を試みた蓋し米國の見るところは、全體主義が民主主義の本場である米洲にまで

た。しかも米國側のこの意味に於ける提案は既に委員會に於て菲られた模様である事は當然の成行であつた。

最近モンテロロ伯參謀總長の訪米をめぐり米國の反ウアルガスの策動説や米伯軍事協定説が傳へられるが、米國は同會議に於て有形的にはさしたる收穫はなかつたのである。しかもその意味に於ける成功は英國を背景とせる亞國の横槍と南米主要國の代表の影に動いて居た獨伊諸國の大暗躍に由来した事は争ひがたい。

伯國と文化的見地に於て尤も相近せるは米國にあらず、英國にあらずはたまた獨逸でも伊太利でも無く、實に佛國である。軍事(陸軍)にまれ、教育にまれ、文學にまれ醫學にまれ、その他精神文明の大部分は、伯國は佛國を模倣する、從つて佛伯國の國交はこの文化的提携にはじまり、經濟關係によつて更に強化される。しかし政治上に於ては伯國は必ずしも佛國に追従しない。

獨伯關係

新國家實現後の獨伯關係の基調は、求償マルタ協定にある。この經濟關係なくしては獨伯關係は頗る水臭いものであらう。蓋し伯國は昨年初期以來の南三州(リオ・グランデ・ド・スル、サンタ・カタリナ、パラナ)に於けるナチ運動撲滅によつて、獨人の反感を買つて居る結果、一時中止の説があつた。該協定を存續せしむる事が獨人の感情を和け且つ米國に對する一種の牽制策ともなる許りか該協定の結果は伯國は北方棉を主とする伯棉の捌け口を發見し、特に是等國民的嗜好に合せる「安價良質の獨逸品」を購入する事が出来るのである。

英伯關係

資本關係に於て伯英は多年相當密接なる關係を持つ。鐵道鑛山等に對する英國の伯國に於ける投資額は、列強資本國家中の第一位に居るが英國が通商上伯人には歓迎されぬ出超の貿易尻を有せる關係と伯國輸出品の大宗である珈琲を購入しないと言ふ事實のため、常に英國が國際關係に於て受身的立場におかれて居り、現在のところ伯國に對し大した發言權はない様である。英伯の國交は大體に於て灰色と見てよい様である。

佛伯關係

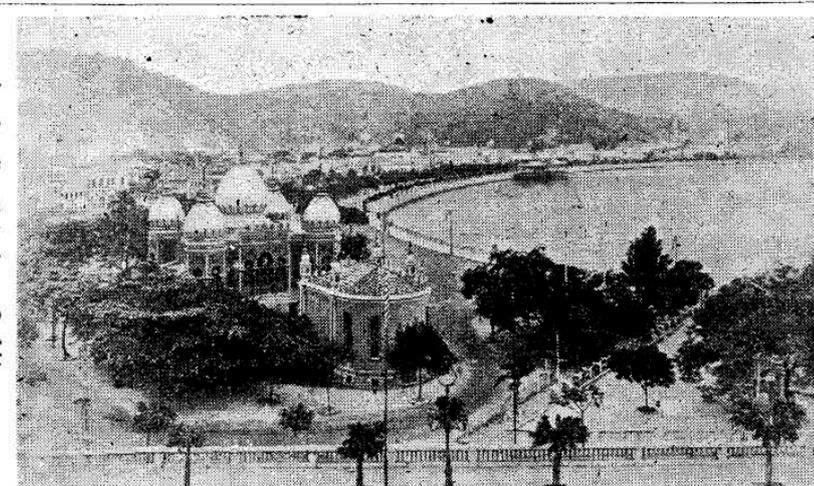
佛國は英國と異り伯産珈琲を最も多量に輸入する國としてまた、常に伯國には出超尻を残す貿易對手國として歓迎せられる。伯國には佛國が尤も危険のない國家として恒久的の友誼關係が維持されて居る。

伊伯關係

伯伊關係は血を以てつながると言ふ親戚關係を根本義とする。即ち現在伯國には數百萬人の伊國人乃至伊系伯人ありて、他の歐洲諸國移民及日本人等に比し一尤も同化し易い移民」として良民鑑賞の標となつて居る關係上、その國交は可成り堅い基礎の上におかれて居る。伊國のエチオピア占領を承認した事實の如きも伊太利に對する友誼的のものである。伯國人はナチスの宣傳運動には可成り神經を尖らす、サンパウロ方面に存在せるフアンシヨ運動は之を重視しない様である。

日伯關係

日伯關係は移民問題と通商關係に於て相當の重要性を持つて居る先づ移民問題に就いて言はん、政府は日本移民の勤勉と、その



○リオ・デ・ジャネイロの風景

飛火したのは米洲主として羅典アメリカ諸國に於ける獨伊諸國の勢力が頗る大なるによるものであから、これを一掃せざる限り米洲に於ける全體主義濶漫は之を避け得可くもないと見たからであつ

た問題とするところはヴァルガス政府がどの程度まで米國の意を迎かへるにある。つまりどの程度まで協定を實行するかにある筆者の見るところによると、ウアルガス政府に以て征夷の政策が放棄されぬ限り、またウアルガス大統領に於て對手を組み

た問題とするところはヴァルガス政府がどの程度まで米國の意を迎かへるにある。つまりどの程度まで協定を實行するかにある筆者の見るところによると、ウアルガス政府に以て征夷の政策が放棄されぬ限り、またウアルガス大統領に於て對手を組み

た問題とするところはヴァルガス政府がどの程度まで米國の意を迎かへるにある。つまりどの程度まで協定を實行するかにある筆者の見るところによると、ウアルガス政府に以て征夷の政策が放棄されぬ限り、またウアルガス大統領に於て對手を組み

北支と内地 らか洲滿と支北 送電の眞寫

る成絡聯話電の如一支滿日

を結ぶ三千
キロの長距

離電話線が通信省、朝鮮總督府、滿洲電々、華北電々の四當局協力の下に七月一日から開通した、これに先立ち六月卅日午前九時半からこの記念すべき日滿支一如の具現たる劃期的事業の開通祝賀通話が行はれ、田邊逋相と王克敏委員長の挨拶を皮切りに軍部及各界代表の交馳、話があり新聞通信界を代表して岩永同盟、信社長と神子島北支總局長との間に

挨拶が交さ

れ終つて正
午より同盟

通信社北支總局(北京)から携帶用寫眞電送機に依り開式的光景寫眞が同盟大阪支社へ寫眞電送のトップを切つて送られた。これは直ちに同盟の國內電送線に依り全國に中繼電送され當日の夕刊各紙を飾つたのである。恰かも天津租界問題重大の折柄同盟電送機は直ちに天津へ急送され翌一日から天津大阪間電送を繼續實施し嚴戒中の天津市中光景や檢問檢案の寫眞等が電送された。今後も北支の重要寫眞はこの電送機により或は北京から或は天津から隨時電送さ

れることになつてゐるから線路上に故障のない限り大いにその威力を發揮するであらう。一方滿蒙國境に於ては暴戾の聯軍の不法越境に

新京大阪間

寫眞電送の臨時業務が開始されることとなつたので直ちにこれを利用し同日午後七時日滿間最初の電送寫眞



依り形勢俄然重大化して來たので同盟通信社では逸早く携帶用電送機を滿洲に急送し重要寫眞の電送に備へることとしたが滿洲電々會社と遼信省との間に實驗電送寫眞の名に於て七月一日

(第一面から續く)

農業的才能に絶大の信用を持つて居り、如何なる外來移民も日本人に及ぶ可きものなしとまで、確信して居る様である。従て日本移民を相當數誘入し、伯國の農業的開發に利用せんと考へて居るもの一部排日家(主として親米主義の民間分子)の意見及日支事變に對する曲解等によりその意圖を實行に移す事が出来ない。即ち昨年五月發令を見た移民法で認められた。

剩餘對當職通法なるものは、何の點より見るも日本移民に有利で政府が大量の日本移民誘入を意圖して居た事は明かであるが、前記諸理由により今獨立を適用するにいたつて居ない。但し該移民法により、政府は國內の外人植民地小學校の教育に就いては、可成り嚴重なる規定を設けたがその理由は移民の大量誘入は差支へないが同時に一旦入國したる外國人乃至その子孫はよろしくブラジル國民たる可しと言ふにあつた。従つて政府は教育問題に關する限り獨伊波日等の諸外國人小學校に對して相當苛酷な彈壓をなした(其他の外國人は小學校を有する事少し)今次政府は日本移民を見かへし剩餘對當職通法を適用するか否かは豫測の限りではないが、ある程度までの實現性はある様である。

日伯通商關係は一九三六年以來日本が伯棉の大量輸入を開始してから日本側に不利な片貿易となり昨年は遂に三千四百萬圓の出入超となつた(輸入四七〇〇萬圓、輸出一三〇〇萬圓)

右の如き次第であるから伯國政府では先年來日本側より求償協定締結の申出でもありはしないかと内心憂慮して居ることであるが、日本の輸入する伯棉なるものが大部分在留日本人によつて生産されたものなる事、並にその購

入が移民問題を考慮に入れた國策的のものである關係上、日本側よりかかる協定の提案はなさざる意向ではないかと解される。

伯國との南米諸國との關係

伯國と對南米諸國との國際關係では對亞關係が尤も重要性を帯びて居る。政治上にても軍事上にも通商上に於ても伯亞兩國の國際關係は一般想像以上デリケートである。

伯國が汎米會議後表面親米政策を標榜せるに對し亞國は積年の親英政策を以て終始する。これは英國輸出品の大案である相咖啡の最大顧客が米國であるに對し、亞國の重要輸出品たる肉類や小麦等が英國を最大顧客とする事實に最大理由が見えされる譯であるが、軍事上に於ても亞國の海主陸從主義に對し、伯國の陸主海從主義は相反し、亞國が孤立主義の國防を確立せんとするに對し伯國は智利、ボリビア等の諸國と連衡せんとして居る。特に亞國の海軍力は世界第二流國の最右翼を行かんとするもので伯國には一大脅威たるを

滿洲處女飛行

同盟第二號機の活躍

六月二十四日〇〇基地より一氣に福岡に快航油頭占領第一報の寫眞、映畫フィルムを空輸に成功した同盟第二號機は、さらに機體を休む暇もなく國通の要請に應じて七月二日北滿の新戰場にハルハ河事件の特報空輸の使命を帯びて出發、折柄同地方特有の雨季に荒天を冒して數度の難飛行を繰返しつつ、或時は敵機群の曠野の上空を飛ぶ等、ハリキリ飛行士細川君の

活躍と沈勇高橋機關士武田通信士の腕の力を充分に發揮し國通諸氏の絶讃を浴びた。荒天と前線連絡の爲六日間のハイル待機を餘儀なくされたが、歸還飛行には巧みに低氣壓の圏外を飛び大連、青島を迂回、各社機を斷然切離しつつ七月十二日午前八時八分羽田にゴールインした。(龜田生)

悲壯・感慨無量の

汕頭一番乗り

特派員 竹野進一

五月十九日夜、海軍主力部隊の乗る御用船〇〇丸に便乗、二十日午前二時出港、船中海南島崖の猿圓太なぞとはむれつゝ同夜十一時頃に蓬濠島沖合に着いた。星こそ出てゐるが眞暗で何も見えず、汕頭入口に在る軍船の指導標燈(燈臺は九時頃早くも消燈)のみが青、白、赤と

三段に光つ

てゐて、黒くぼんやり見える軍艦や何十隻かの大船團が沖合を埋めつくしてゐるので、初めてこれから戦争が始まるのかと思ふと一寸身が引しまる様な気持ちだつた、我々の乗つて行つた〇〇特陸隊の〇〇司令から、敵前上陸する最初の鐵製大型發動艇に各社二各宛乗せる(大發は最初四隻出た)からと云はれて、結局僕が此の決死の一番乗りに加つてしまつた。一番乗りの船には日、朝日、僕と夫々各船一名づゝ乗船した。かくて午前三時大發が無言の中に〇〇丸と別れたが、このとき僕の気持ちもやゝ静まつた。「もうどうしやうにも、歸る事は出来なかつたのですね。そして腰に下げた家の者の心を込めて持たしてくれたお守を左手で一握つて見て

たのむよ

と心の中で言つて見た。大發はぎつしり詰つた兵を乗せて大

兵達は何も聲を出さず銃剣つけた鐵砲を横たへて鐵船を次々に飛び出して行く、僕は一體出てよいのか、艇に居るのか分らないので一人の兵に「僕も行ってよいか」と尋ねたら「行きなさい」と答へたので、兵隊にはぐれないやうに飛び出して行つた。

實に静かな

もので足音一つ立たない。併も眞暗で何處に兵が居るのか少しも判らないので、砂濱の窪地を手さぐりで其處に這ひつくばり、又手さぐりで兵の居るところを感じて進む……この時の気持は一寸言へない……鐵砲の音もしない、鐵カブトの紐をしつかり結び直して砂地を上へ上へと行くと、一かたまりの兵に出會つた。これに離れたら大變だと思つてそれからバツタリとくつゝいて這つて行つた。すると背後左の方に當つてパソ……パソと銃聲が十五發聞えた。敵か味方か分らない、ハツとして又窪地に這つてしまつた。銃聲引續き闇の中に聞えて来る、ワツと言ふ喚聲が同時に起つて只ならぬ氣配を見た。僕等の一團は間もなく朽ちはたてた城壁上に達した、僕等の兵の方には少しも敵が居らなかつたのだ。

そばに居た

兵士が小聲で「そこはあぶないから下りろ!」と云つてくれたが、どうもしも下りる氣になれず「弾が當るなら仕方ねえ!」と云つた一寸ヤケ半分で寝てみた、上を見るも星が光つてゐる涼しくこんなよい處はないと本當に思つた、その中になんだかうとくして来た様だと思つたら艇がガタンと止つたので驚いて目をさました目の前には大きな黒山が眞暗な中に見えるではないか、ハツと思つて艇の中にもぐり込んだ、これが敵前上陸の場所だ、砂濱だつたのである。時に午前五時十五分

勇敢な兵は

城壁の高い塔みたいな上に昇つて軍艦旗をする、と高く上げた、母嶼は占領された(午前五時四十五分)と思つたと同時に、もう死ぬ氣遣はないと判り知つた、あたりも漸くうす明るくなつて来た、右方の銃聲はその後幾度か起つたがそのうちバツタリ止んで、小高い丘にも小さい軍艦旗が翻舞と翻つてゐた。前方嶺江入口から沖の方を見ると、何十隻とも知らぬ大船團が一列になつて、波をけつて来た、實に勇壯なもの

逃げる敵と

追ふ陸隊隊が二百米位の間をおいてはつきり見える。一方嶺江突角に敵前上陸した陸軍部隊の進撃が銃砲聲によつてよく分り又蓬濠島を進む陸軍も既に灣内の山の上に日章旗を翻へしつゝ進むのが手にとるやうに見える。五十數機の海の荒鷲が物凄く爆音をたて、大編隊飛行で敵の集團地區目けて爆撃を投下して地響きをたてゐる。僕は軍から午後六時前の無電使用を禁じられてゐたが、試験をするだけだと云つて早速戦況ニュースを打つて見た、暫らくの間は無電の調子が悪くて、臺北をいくら呼んでも出ないので焦つたが、それでも葛原君(全關新日報社から借りて来た人)の努力で

故柳澤君の

餘榮

「旭八」下賜さる

昨年二月十三日津浦線曲阜南方八キロの地點小雪附近で壯烈なる戦死を遂げた元本社映畫部員たる故柳澤文雄君は、去る六月二十日附を以て勳八等旭日章下賜の恩典に浴した。この餘榮こそは同君が戦線に於ける功勞を物語る總てであつて、遺族一同の光榮するに餘りある。同君また瞑すべきである。故柳澤君は事變發生と共に愛機

通じた時は

とても嬉し

報は勿論母嶼に占領だ。見れば倚録砲臺(汕頭の近く)の近くで飛行機の集中爆撃が行はれ、一方現發機雷は各所に水柱を上げて爆破されてゐる。午後三時半頃軍の命令で汕頭海岸の目の前に頭張つてゐる驅逐艦〇〇に乗艦した。艦から望遠鏡で見ると海岸通りに長く築かれたトーチカのかげにずらりと支那兵がならび青い鐵カブトを被つて木の葉で覆ひしきりにこちらをねらつてゐるのがよく分る。支那兵もなにか々々生命知らずと思つたが、さうした姿をこちらに分らないと思つて支那兵を考へると可笑しかつた。その中に夜になると銃砲聲と爆撃の音が益々高く、汕頭市街からは三ヶ所に炎々たる火の手が上つて物凄く、戦争は最高潮に達した。わが軍艦からは強烈なサーチライトが

布告が出て

市民に日本の早くも陳覺民を會長として治安維持會が出来た。便衣に姿をかへた敗殘兵は未だ相當に居るらしく、軍の警備は嚴重なものだが、市民の顔はそんなに暗くはない。

幾條も照し

出されてゐる。明ければ二十二日午前七時、汕頭上陸だ。大發を携へて勇躍従軍し、北支の山野を馳驅して皇軍將兵とともに總ゆる辛苦を重ね、硝煙彈雨の下を潜



りて幾度か身を危地にさらし、併も常に最前線に立ちて映畫報國に身を投げ出して克く其の使命の重きに任じ、敏活なる行動と優秀

獨波デ盃戰

物凄い接戦を見る

ワルシヤ、森元治郎

去る五月下旬ワルシヤの體育
コートで行はれた獨逸對ポーラ
ンのデ盃足球戰は

獨波關係

極度の緊張の折柄
とて本當の戰爭を
見る様な慘と興奮に終始した。三
日の豫定が更に二日も延長された
といふのも原因は歐洲の文明都市
の國際マツチには珍らしい物凄い
低級な彌次と聲援にポーランド側
選手は實力以上を發揮して攻めた
て獨逸選手は殊にメンツェル等は
のほせ上り腐りきつた爲止めの一
打が逆にポーランド側に利用され
たりしてジェ
スを繰り返した
故である。ポー
ランドの體育ス
ポーツは全般に
互り未だ幼稚で
目下文部省が頻
りにこれが發展
普及を企圖して
ゐる。従つて民
衆といふものは
一部のインテリ
階級を除き殆ん
どルールは理解
せず只勝てばよ
いといつた式で
ある。日本の體
協出現前の彌次
り合ひの域を脱
せず、田舎の青
年團の野球試合
程度であると思
へば間違ひない



この國では凡ての
スポーツが興味本位、娛樂
中心である。一般
化してゐるのは蹴球であるが、こ
れとて一般小中学生はたゞボール
を蹴つて遊ぶだけで、競技といふ
様な事には慣れてゐない、結局試
合の結果は三對二で獨逸の勝ちに
歸したが、民衆も新聞も「これは
スポーツだが獨逸が戰場に會して
も容易にボ軍を破り得ないことを
證明したものだ」とスポーツを政
治に引掛けて思ひ上り氣味の自信
を付けてゐる何んでも獨逸をやつ

つけるといふのだから紳士スポー
ツの庭球も殺氣が溢つてゐるのは
當然だ、メンツェルは猶太で而も
ヒットラーの軍門に降つた前チエ
コ人であるところから而も亦彼の
やゝ神經質で、人を喰つた態度な
ども觀衆の反感をそゝり非常な不
人氣でヤンヤといふ惡罵冷笑であ
る。觀衆は彼の失策にドツと嘲笑
を叩きつけ、少し

彼が調子

がよかつたり悪か
つたりすると「ハ
ツハ：HACHA前チエツコ大統
領で獨逸に併合を承諾した裏切者
といふ譯：ハツハ」と彌次りまく
る。勿論低料金席の騒ぎではある
また觀衆は審判の判定をまたず相
手方ならアウトとを宣し統制も
つかぬ。審判は殆んどボ庭球協會
の役員であつたが、どうも觀衆に
神聖なるべき判定が押され氣味だ
つた、線審がイン・アウトを宣言
するのにもスタンドの騒音に妨害さ
れて聞きとれぬ、主審が判定を不
審さうに更に聞き返せばその責任
ある審判者は背後の無知の彌次に
怒鳴られつあいまいな返事が一
二回見受けられた始末だ。また審
判も再三のミスをやつてゐる、メ
ンツェルがサーグした時ネットに
あつたことは

相手方のトロチンスキーも不審さ
うに打返し應酬二、三回の後ト選
手が遂に失策したら審判は「只今
のはネットです」と判定したシン
ゲル第三日メンツェル敗退しヘン
ケル代つて、バプロフスキーと對
戦した。コートは更めて綺麗に掃
き清められてゐる、ヘンケルの一
打はバ選手の右死角を抜き明々白
々なインである、ボールは砂に一
線をクツキリと付けて流れたが、
審判はアウトと言つた、またト選
手の強い一球は後方ライン上にあ
つたメンツェルの頭上に飛來し
た、何人もアウトと思つた、メン
ツェルはアウトですといはんばか
りの態度で軽く後向きで打ち返し
た、バ選手も「しまつた」といふ
様に呆然立つてゐるところへ球が
歸つて來た、彼は驚いて返球した
ので戰はそのまゝ選手も心ある
觀衆も疑はしい様子で續けられた
が、バ選手はこれを落してしまつ
た、メンツェルの負である、故意
か偶然の

見誤りか
荷しくも國際デ盃
戰であるのに右の
例ばかりでなくその外にも素人の
目にハツキリと正誤の判るミスを
再三ならず續けたことはその理由
が何であれポーランド側役員の失
態は當然で責をとるべきものであ
らう、或る時は獨波兩選手とも一
回つゝ審判の判定を訂正してスポ
ーツ精神を發揮して呉れたのは只
一つの慰めであつた、インテリ
あるスタンドの各所には獨逸人も
中立の外人も澤山居つた、以上の
ことはその話題の中心をなし「こ
んなに汚いスポーツなど止めてし
まへ、審判が無茶なら試合などや
る必要はない」といふ非難の聲が
頻りだつた、メンツェルは毒舌に
やゝ興奮し審判の不公平に彼は幾
度か頭をすくめ両手をひろげ正面
スタンドに觀戰中のモルトケ獨逸
大使やその他の有識者の居りそう
なスタンドに向つて「正當な判断
をして下さい、皆さん今の結果を
御覽になりましたか、神上助け給
へ」と云はんばかりの哀れなヂエ
スチユアをして見せた、第三者に
は多數の同情者があつた、彼は怒
つた

試合を捨
てた、遂にトロチ
ンスキーに敗れる
やラケットを地に投げ付け後も見
ずに退場した、觀衆は彼はスポー
ツ精神を冒瀆するものと罵倒した
バプロフスキーは本年度の波蘭庭
球ランキング第一位であるがトロ
チンスキーの方が出来がよく強い
ねばりを見せた、ヘンケルの美技
には彼の朗らかな人柄も手傳つて賞
讃され一般も悪口を云ふチヤンス
を見出し得なかつた様だ、ポーラ

回つゝ審判の判定を訂正してスポ
ーツ精神を發揮して呉れたのは只
一つの慰めであつた、インテリ
あるスタンドの各所には獨逸人も
中立の外人も澤山居つた、以上の
ことはその話題の中心をなし「こ
んなに汚いスポーツなど止めてし
まへ、審判が無茶なら試合などや
る必要はない」といふ非難の聲が
頻りだつた、メンツェルは毒舌に
やゝ興奮し審判の不公平に彼は幾
度か頭をすくめ両手をひろげ正面
スタンドに觀戰中のモルトケ獨逸
大使やその他の有識者の居りそう
なスタンドに向つて「正當な判断
をして下さい、皆さん今の結果を
御覽になりましたか、神上助け給
へ」と云はんばかりの哀れなヂエ
スチユアをして見せた、第三者に
は多數の同情者があつた、彼は怒
つた

日本からでも二十年は遅れてゐる
といふ事を感じた、然し憎悪に満
ちたポーランド國民のうさを晴ら
したものとすれば多少はその氣持
ちも理解される。六月始めに行は
れる豫定の
獨波拳闘
試合は獨逸が斷つ
た。また波國は獨
逸との陸上競技戰もその復讐とし
て斷つた、スポーツ界は既に獨波
戰を開始してゐる。(決して獨逸
びい氣目で書いたのではないこと
を附記する)

實權者を
擲論するが、この
ネクトドトを好む習性がある、何
故獨逸は試合毎に強くなつて行つ
たか？、それはポーランドに來て
バタとコーヒを艦腹たべたから
さ、ダブルはどうして獨逸が上手
かね？ スポーツばかりぢやない
政治でもなかなかダブル・プレー
はお手もののだ、等々これは新聞
紙上からの抜き書きである。獨波
庭球戰を見てまだまだこの國はス
ポーツをやめる下地が出来てない。
日本からでも二十年は遅れてゐる
といふ事を感じた、然し憎悪に満
ちたポーランド國民のうさを晴ら
したものとすれば多少はその氣持
ちも理解される。六月始めに行は
れる豫定の

第三回同盟寫眞展覽會は既報の
如く社内の出品作品を募集したと
ころ應募作品二百數十點に及び、
之を日本寫眞學士會々員小西技術

第三回寫眞
天狗會
出陳九十二點

第一 一部
一等一席(海の朝) 大村徳太郎
二等一席(無題) 波多野健一

第二 一部
二等一席(無題) 川島信太郎
二等二席(Kちゃん) 矢上 誠
三等一席(大川端) 酒井 忠男
三等二席(藤) 矢上 誠
三等三席(無題) 吉田 宗男
佳作(光る燈臺) 古田二郎(べん
ざん鳥) 山下義夫 (神前) 村山
謙 (明石) 矢上誠 (麗春) 古田
二郎 (紫禁内裏) 福岡誠一

二等二席(天眞) 内山林之助
三等一席(無題) 林十水而樂生
三等二席(瀑) 牛腸 五郎
三等三席(初夏の夜) 小川 三郎
佳作(鹽をまく) 龍玉山同人
(雪) 菊地長五郎 (夢) 内山林之
助 (老漁夫) 内山林之助 (何
を見る) 春田昇 (風) 春田昇
(八重櫻) 春田昇 (顔) 阿部隆
(無題) 阿部隆 (クロバ) 阿部隆
(無題) 阿部隆 (寒中游泳) 阿部隆
(日文親善) 不動健治 (無題) 波
多野健一 (暮さ) 石井周治

同盟人事

(701)

中南支總局局長 磯田小四郎

中南支總局聯絡部長 吉井 政司

中南支總局聯絡部次長 大屋久壽雄

河內特派員 大屋久壽雄

中南支總局臨時在勤 前田 雄二

(內信局社會部社員) 香港支局勤務 河內特派員 命

(六・二二各通) 經濟局商況部准社員 小海長壽郎

中南支總局勤務 命 國井 年春

准社員 命 岩坂 大吉

中南支總局勤務 命 藤田 正互

外信局發信部准社員 藤田 正互

同 篠森 三郎

同 淺倉 泰

同 井出 新六

同 戶國 清太

中南支總局勤務 命 小田島房志

外信局發信部 小田島房志

准社員 命 北支總局勤務 命 高雄 辰馬

內信局社會部社員 高雄 辰馬

滿洲國通信社(出張) 命 大阪支社社員 明瀨 裕

名古屋支社勤務 命 長谷川朝二

社員 命 福岡支社勤務 命 土子 猛

准社員試用、京都支局勤務 命 小野 一行

(七・一) 准社員試用、廣島支局勤務 命 太田 恒彌

(六・一一) 內信局經濟部社員試用 門脇 誠

同 同 高見 正道

同 同 荒尾 達雄

同 同 井野 康彦

同 同 本田 孝一

同 同 親孝 親孝

同 同 憲一 憲一

同 同 山田 禮三

同 同 山田 實

同 同 中村 憲二

同 同 木谷德三郎

同 同 事業局調查部社員試用

同 同 事業局寫真部勤務准社員

同 同 廣東支局准社員 中野 正光

同 同 中南支總局社員試用 俊雄

同 同 大場康二 熊澤 俊彦

同 同 福岡支社社員試用 小佐々朝治

同 同 神戶支局社員試用 正一

同 同 西川 健三

同 同 小畑カサリン

能勢 剛吉

同 同 菊地 澄子

同 同 田村 とし

同 同 津田 豊人

同 同 唐木 ゆき

同 同 山崎 政雄

同 同 林 東作

同 同 石井 きみ

同 同 菊田 マサ

同 同 坂谷不二夫

同 同 井上 富子

同 同 式田 シヅ

同 同 森 八重子

同 同 網引萬壽子

同 同 伊藤 正雄

同 同 渡邊 要吉

同 同 一各通

同 同 神戶 芳夫

同 同 池東 正資

同 同 石坂 晃一

同 同 大塚 良一

同 同 堀井 三枝

同 同 甲田 慶三

同 同 高橋 平治

同 同 吉岡 磨子

同 同 田村 とし

同 同 津田 豊人

同 同 唐木 ゆき

同 同 山崎 政雄

同 同 林 東作

同 同 石井 きみ

同 同 菊田 マサ

同 同 坂谷不二夫

同 同 井上 富子

同 同 式田 シヅ

同 同 森 八重子

同 同 網引萬壽子

同 同 伊藤 正雄

同 同 渡邊 要吉

同 同 一各通

同 同 神戶 芳夫

同 同 池東 正資

同 同 石坂 晃一

同 同 大塚 良一

同 同 堀井 三枝

同 同 甲田 慶三

同 同 高橋 平治

同 同 吉岡 磨子

同 同 田村 とし

同 同 津田 豊人

同 同 唐木 ゆき

同 同 山崎 政雄

同 同 林 東作

同 同 石井 きみ

同 同 菊田 マサ

同 同 坂谷不二夫

同 同 井上 富子

同 同 式田 シヅ

同 同 森 八重子

同 同 網引萬壽子

同 同 伊藤 正雄

同 同 渡邊 要吉

同 同 一各通

同 同 神戶 芳夫

同 同 池東 正資

同 同 石坂 晃一

同 同 大塚 良一

同 同 堀井 三枝

同 同 甲田 慶三

同 同 高橋 平治

同 同 吉岡 磨子

同 同 田村 とし

同 同 津田 豊人

同 同 唐木 ゆき

同 同 山崎 政雄

同 同 林 東作

同 同 石井 きみ

同 同 菊田 マサ

同 同 坂谷不二夫

同 同 井上 富子

同 同 式田 シヅ

同 同 森 八重子

同 同 網引萬壽子

同 同 伊藤 正雄

同 同 渡邊 要吉

同 同 一各通

同 同 神戶 芳夫

同 同 池東 正資

同 同 石坂 晃一

同 同 大塚 良一

同 同 堀井 三枝

同 同 甲田 慶三

同 同 高橋 平治

同 同 吉岡 磨子

同 同 田村 とし

同 同 津田 豊人

同 同 唐木 ゆき

同 同 山崎 政雄

同 同 林 東作

同 同 石井 きみ

同 同 菊田 マサ

同 同 坂谷不二夫

同 同 井上 富子

同 同 式田 シヅ

同 同 森 八重子

同 同 網引萬壽子

同 同 伊藤 正雄

同 同 渡邊 要吉

同 同 一各通

同 同 神戶 芳夫

同 同 池東 正資

同 同 石坂 晃一

同 同 大塚 良一

同 同 堀井 三枝

同 同 甲田 慶三

懐し宇多中尉!!

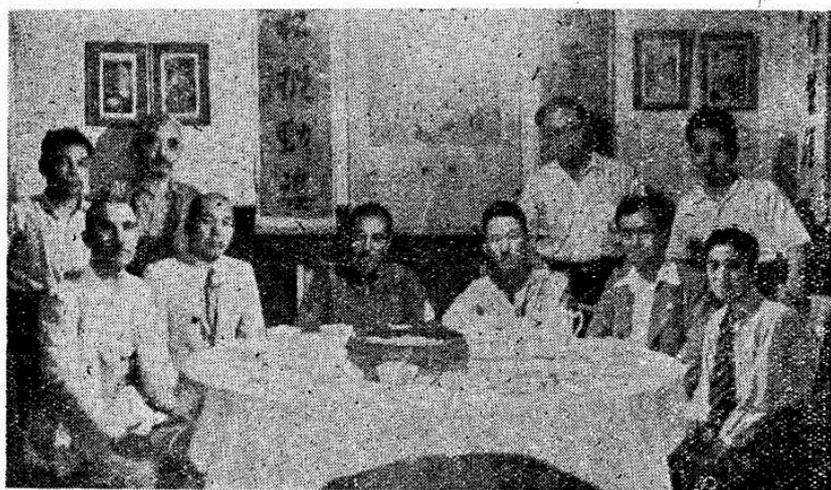
烈々たる闘志

その面上に漲ぎる

北支總局 齋藤 正 躬

中支の戦線に驍名を馳せた宇多部隊長（本社々會部）が七月八日突然北京に現れた。明朝直ぐ出發と云ふ電話なので舊知の友人達が玉華臺に集り、晚餐の食卓を圍んだのであつたが、久し振りに見る宇多中尉の姿は一日、年餘の苦闘を偲ばせ、從軍に馴れ切つた私さへもが思はず感動に惹き入れられ

程のものであつた。坊主頭と立派な髭とは別としてガツシリしてゐた體軀は瘦せ細り、軍装は汚れ肩章はさびびつて見る蔭もない。而も中尉の面上にはなほ烈々たる闘志が輝き、勞苦に洗はれ磨き上げられた精神力は寧ろ謙讓に過ぎる態度の中から美しい人格の光となつて滲み出てゐるのであつた。



電氣の點いてゐる所へ來たのが八ヶ月振り、而も今朝迄北京へ來られる等とは夢にも思はなかつたと云ふ中尉は「出征以來こんな嬉しい事はありませぬ」と云ひながら元氣に語つたが、その闘闘振りは實に勇敢であり「隊長殿濟みませぬ」と云ひながら部下が死ぬ時は全く堪りませぬ……と話す邊り部隊を指揮するものゝ常とは云へ肺腑をつくものがあり、私が之迄會つた○隊長の中でも最も優秀な一

人であると深く感じたのであつた

九日の朝、四邊にそぐはない鐵帽を背負つた宇多中尉は、たゞ一人前門驛から一線に向つて元氣よく出發した。離れて行く列車の窓から差し出した中尉の手が見えなくなつた時私は「内地では澤山金持が出來て盛んに×××あると云ふけれど、アシは反つて結構な話したと思ひます。すつかり統制されて手も足も出なくなつたなんて云ふよりは氣が強いだけでもいゝ

ですよ」と云つた昨夜の中尉の言葉を、ふと思ひ出して沁み沁みとした氣持になつた。之は眞に戰鬥の中で鍛えられた人間のみのが云ひ得る言葉であり、その秀れた部隊長の一人を知己に持つ事を心から嬉しく又悲しく感じられたからである。

（寫眞八日玉華臺にて前列左から作間中佐、濱田北支軍報課長、宇多中尉、及川氏、大岩通信部長、齋藤、後列左から小椋寫眞部長、神子島總局長、後藤氏、小暮氏）——相澤氏撮影

寒氣を衝いて……

富士登山隊の快舉

望 月 七 郎

同盟

富士登山隊一行約三十名は上田理事を筆頭に七月廿二、三日の兩日に互つて舉行された恒例の電通富士登山會に参加した。一行は廿二日午後四時過ぎ御殿場に到着、登山用の上衣巻脚絆等用意して六時過ぎ自動車で馬返しに向つた。山の天候が悪いらしい。時折雨が降る。筆者と連絡の峠氏は新聞通信社組選手として参加した爲め宿舎を出發したのは十時過ぎだつた。

霧雨

の切目から八合目、九合目、頂上の近くまで一瞬の間に見る事もあつたが、墨の様な色をした夜の富士は、たちまち吹き上げる霧雨にかくされてしもう。六合目、七合目と榕岩

警告

を放送したとの事だつた。登山隊一行の諸氏左の如し。

選手

望月七郎、峯喜十

火に燬をとつて、一時十分いよいよスタートを切つた。腹部にしっかりと結えつけた電燈の光と杖をたよりに深夜の森林地帯を走る。自信たつぷりの各選手の手走ぶりは驚くばかりだつた。二合目を過ぎる頃から霧が深くなつた。電燈の光が薄ぼんやりと行手を照して何んとなく無氣味さを感じた、三合目を越へ四合目に近づく頃になる

と木立は盡きて一面の榕岩でその中を路は屈折する、この邊から寒さが加はり始めた。此の寒さの中を縦衣一枚に半ズボンと云ふ恰好で登つて行くも霧雨が横なぐりに吹きつける。折々

△男子組
上田碩三、進藤陽吉郎、鈴木幸次郎、松本兼吉、亀田賢、片山和衝、前島光太郎、新井勝太郎、川島信太郎、伊藤重雄、諸富一郎、角田二三雄、諸橋周平、松永一夫、山田良太郎、高野信太郎

の肌を踏んで唯々山頂目ざして、そぐ。既に疲れたらしい登山者の幾人かが、二三歩あるいては地面に座り岩にしがみつき胸突入丁の附近で到頭へばたつてしまつた。高山病にでもかゝつたのであらう白衣の道者が傍に苦しんでゐた。だが山の天候は不思議なものでこんな悪天候にも拘らず八合目半で御來光を迎へた。ときに突然「ピリッ」と警笛が鳴つた、仰向いて見ると頂上で盛んに「もう少しだ頭張れ」と叫んでゐる。最後の勇氣を鼓舞して一氣にかけ上る。時に五時五分、出發してより三時間五十五分。先發隊の一行は途中落伍者も幾人かあり山頂へ着いたのは大部後れてゐたが上田常務理事が壯者を凌ぐ元氣さで登つてこられた。山頂で君が代合唱、萬歳三唱、賞品授與詩吟などあり、一行はすつかり元氣を恢復して下山した。下山してから聞いたのだが當日は琉球方面から刻々内地に向つて颶風が迫りつゝあつたので登山は全國的に見合せるべしとの

△女子組
上田節子、高尾ゆき子、中島かね子、澤口ふく子、岡野花子、小林春子、田中綾子、原たけ子、中村せい子、齋藤喜代子、朝倉八重子、布浦富美子、角智恵子

△選手
望月七郎、峯喜十

を放送したとの事だつた。登山隊一行の諸氏左の如し。

△選手
望月七郎、峯喜十

を放送したとの事だつた。登山隊一行の諸氏左の如し。

△選手
望月七郎、峯喜十

を放送したとの事だつた。登山隊一行の諸氏左の如し。

△選手
望月七郎、峯喜十

△選手
望月七郎、峯喜十

- (人事續き)
- 同 (同 囑託) 渡邊 義美
 - 同 (事業局) 中田 義次
 - 同 寫眞部撮影主任) 山本 守
 - 本社(歸還ヲ命ス(七・六各通)
 - 北支總局臨時在勤 (聯絡局規畫部社員) 山本 守
 - (聯絡局規畫部社員) 山本 守
 - 本社(歸還ヲ命ス(七・五)
 - 滿洲國通信社(出張中 宇都宮 聯絡局規畫部社員試用 要 本社(歸還ヲ命ス(七・二五)
 - 總務局ノ事務ヲ囑託ス(七・二)
 - 名取洋之助
 - 中南支總局ノ事務ヲ囑託ス
 - 福岡支社社員 藤岡 達郎
 - 職員規程第十九條第二項ニ依リ休職ヲ命ス(七・二)
 - 關門支社社員 上田 徳造
 - 休職期間満了ニ付退社(六・三〇)
 - 中南支總局 休職期間満了ニ付退社(七・一)
 - 休職期間満了ニ付退社(七・一)
 - 内信局發送部社員 小山和四郎
 - 經濟局商況部社員 鮎原壽喜登
 - 北支總局社員 鮎原 周太
 - 福岡支社社員試用 原田 一
 - 依願解職(六・三〇各通)
 - 大連支局長事務囑託 升井 芳平
 - 張家口支局 澁谷 春夫
 - 長事務囑託 松田 梧
 - 厚和支局長事務囑託 向井勘一郎
 - 依願解職(七・一)
 - 神戶支社社員 井上 富子
 - 依願解職(七・三)
 - 橫濱支局准社員 田中 啓次
 - 依願解職(七・四)
 - 事業局映畫部囑託 馬場 常治
 - 依願解職(七・六)
 - 内信局特信部囑託 田中 綾子
 - 依願解職(七・一〇)
 - 關門支社准社員 氏家喜代子
 - 依願解職(七・二)
 - 神戶支局准社員 戸田喜八郎
 - 依願解職(七・一三)
 - 總務局經理部社員 松岡 フサ
 - 大阪支社准社員 依願解職(七・一五各通)
 - 中南支總局寫眞部長 青木元一郎
 - 死亡(七・一三)

國際通信戰 (下)

遞信省

五、東亞電氣通信政策の確立と國際電氣通信株式會社の擴充

東亞に於ける電氣通信事業がこれまで歐米の勢力下にあつたことは前に述べた通りであるが、我國を中心とする東亞諸民族の自覺に伴ひ、東亞の通信界にも變革が起ることは自然の理である。東亞電氣の通信政策の重要性は最近に於ける東亞の新政態に即應して充分に認識されねばならぬ。即ち滿洲事變を契機として更に今次事變によつて東亞の事態は、全面的な轉回を見せ、今や我が國は東亞の安定勢力として、東洋永遠の平和と東亞諸民族の共同福祉とを確保すべき重責を果すべく、邁進してゐるのである。この歴史的大使命の達成を遺憾無からしめる爲めには

先づ國家活動の要具である東亞各地域の電氣通信事業の飛躍的發展を圖り、將に實現の段階に入つた東亞諸國一體の新秩序生成に先驅せしめなければならぬ。支那に於ける電氣通信事業は、黨軍多年の秕政の結果、この普及發達の幼稚で、設備は粗悪な上、その制度及び組織の未熟粗笨なこと、は宛に想像以上であり、電話は地方的に一部の大都市内又は若干の大都市相互間に架設されてゐるだけで、電信を利用する術のない地域も尙ほ廣大である。電氣通信事業の發達の如何によつてその國の近代國家としての發達の程度がわかる。と言はれてゐるが、この言葉の正しさは、支那に於いて、實際に證明されてゐる。

の全面的普及發達を促進すること、は、政治、經濟活動を盛んにし、治安の確立、産業の開發、文化の向上を期する所以であつて、眞に支那再建の先驅的施設であると言はねばならぬ。従つて東亞の指導的地位に在る我が國が、その優秀な電氣通信の技術と人と資本とを以つて、全面的援助を與へ、大陸の電氣通信事業の整備發達を助成することは、東亞通信政策の基本要目の一であらねばならぬ。而して本政策具體化の第一歩として、既に蒙兀・北支・中支にそれ〴〵日支合辦の「蒙兀電氣通信設備株式會社」、「華北電氣電話株式會社」及び「華中電氣通信株式會社」が設立され、我が國は之に對し人員の融通、技術の指導等出来る限りの援助を與へてゐるのである。

我が國と支那大陸との間の電氣通信は、既述のやうに、長い間餘儀なく大北・大東兩會社の通信路に依存し、その後無線通信の發達に依つて漸く略々自主獨立の域に達したのであるが、今日でも日支間の最重要連絡路である長崎上海間三回線中二回線は大北電氣會社に屬する状態であつて、その他の

區間に於ける我が國所屬の通信路はいづれも未稍の施設であつて大陸内部との連絡を十分ならしめ得ないものである。また我が國と滿洲とを連絡する電氣通信路は、福岡・釜山・安東を経て奉天に至るいはゆる日滿ケーブルの開通によつて、最近著るしく面目を新たにされたけれど、通信著増の趨勢から見て、未だ兩國の連絡上十分と言ふことは出来ない。かやうな電氣通信施設では興隆アジアの新事態に即應し得ず東亞一如の澆れたる活動も期し難いのである。今次事變終局の目的である新東亞建設の爲め、これ等の各地域を有機的一體として結合する緊要迅速な電氣通信網を整備充實し、我が國の對大陸通信の完全な自主獨立を圖ることが東亞通信政策の一大目標でなければならぬ。

日・滿・支相互間に於ける通信が、今次事變を契機とする我が國の國際的、殊に東亞指導的地位の躍進、滿洲に於ける第二次産業五年計畫の進展並びに支那に於ける治安恢復に伴ふ政治・經濟・産業の復興等に依り急増するのは必然の趨勢で、その間滑な疏通を確保する爲めには、今後多數の通信路を必要とし、しかも日滿支三國の緊密な特殊關係に鑑み、その通信路に常に安固確實なことを要するだけではない、通信の秘密漏洩を嚴重に防止する必要がある。これ等の諸要求を充足する電氣通信施設としては、ケーブルを最も適當とするのである。

最近の歐米諸國に於ける電氣通信網整備の状況を見ても、ドイツなどは、既に一九二一年から「獨逸長距離ケーブル會社」に國內全通信網のケーブル化を着手させ、現在完全に歐洲大陸電氣通信の中樞をなし、佛・伊兩國も亦それ〴〵アフリカ植民地に對し地中海橫斷の長距離電話ケーブルを建設中であり、他方アメリカでも、米大陸通信ブロックの擴充強化の爲め對西印度及び中米の電話ケーブル建設計畫を樹ててゐる。

晴れの赴任を待たず

青木元一郎君逝去

中南支總局寫眞部長



中南支總局寫眞部長青木元一郎氏は豫て肺癆垣のため阪大小澤内科に入院加療中の處七月十三日午

後九時廿五分逝去した 享年四十五

氏は栃木縣鹽谷郡熱田村伏久の出身、大正十年日本電報通信社に入り、引續き同盟通信寫眞部次長として入社一昨年六月大阪支社寫眞部長となり昨春秋大支中支戦線の第一線に立つて寫眞班を激勵彈雨下に挺身社務を果して歸還したがこの頃から既に身體に異狀を呈してゐた、本年三月中南支總局寫眞部長に轉

じたが病狀昂進遂に赴任の日を見ず他界したもので痛惜されてゐる。

葬儀は十五日午後三時から大阪此花區上福島中一丁目地藏庵で佛式により執行、未亡人清子さん令嬢潤子さん(一七)ら遺族を始め社長代理理山山常務理事、小田大阪電通理事、森川大朝寫眞部長、角田そごう百貨店取締役、井上松竹常務、山崎日本短編常務理事、塚本大阪支社長以下各部長ら數百名參列盛儀であつた、尚遺骸は午後四時出棺春日出火葬場で荼毘に附し十七日午後一時大阪發着で未亡人遺児に護られて東上した。(自宅は東京市大森區大森町五ノ七二)

また我が國と滿洲とを連絡する電氣通信路は、福岡・釜山・安東を経て奉天に至るいはゆる日滿ケーブルの開通によつて、最近著るしく面目を新たにされたけれど、通信著増の趨勢から見て、未だ兩國の連絡上十分と言ふことは出来ない。かやうな電氣通信施設では興隆アジアの新事態に即應し得ず東亞一如の澆れたる活動も期し難いのである。今次事變終局の目的である新東亞建設の爲め、これ等の各地域を有機的一體として結合する緊要迅速な電氣通信網を整備充實し、我が國の對大陸通信の完全な自主獨立を圖ることが東亞通信政策の一大目標でなければならぬ。

消息 (七月)

- △田中喜次君、上田勇君、桑野茂君、朝田三治君、渡邊義美君、田中啓次君(本社映畫部) 記録映畫「新地平線」撮影隊一行は七月六日元氣で張りきつて歸社。
- △大富信二君(大阪支社聯絡部) 應召中のところ此のほど軍曹に昇進し七月九日召集解除となり同日より出社。
- △久村定雄君(本社經理部) 七月十日東京發甲府、長野、富山、金澤、京都、名古屋各支社局へ出張。
- △上村藤吉君(本社經理部會計主任) 七月十一日東京發朝鮮、滿洲、北支、中支各支社局へ出張。
- △片山和衛君(本社經理部) 北海道、青森各支局へ出張。
- △椎野豐君(リオ・デ・ジャイロ通信員) 七月十一日來社、九月頃歸任の筈。
- △伊藤參與 七月十三日東京發滿洲、北支へ出張。
- △山田常務理事 七月十四日西下大阪に於ける故青木元一郎君の葬儀に參列十六日歸社。
- △小座間茂君(本社地方部) 海南島作戦に特派されて廣東支局へ出張中のところ七月十四日歸社。
- △重徳憲一君(神戸支局) 應召中のところ七月十五日召集解除となり十八日より出社。
- △竹野進一君(本社政治部) 油頭作戦に特派されたが廈門を経て七月二十日歸社。
- △成田周君(名古屋支社經濟部長) 七月二十四日事務打合せのため來社二十五日歸任。
- △松尾信君(本社規畫部) 七月二十四日汕頭、廈門の戦線より歸社。
- △友松敏夫君(國通出向社員桑港支局勤務) 七月二十六日午後三時横濱出帆の鎌倉九で赴任。
- △伊藤大二君(本社經理部) 七月二十六日東京發新潟、仙臺各支局へ出張。
- △岩城政治君(國通出向本社整理部) 國通本社へ歸還することゝなり七月三十一日東京發